

楽しい古典の授業への試行錯誤

村 井 朱 夏

はじめに

本稿は、昭和五十九年度第百三十二回早稲田大学国語教育学会例会の折に、「実践報告」として発表させていただきましたものの一部をまとめたものです。私立麴町学園女子高校に、講師として勤めて今年で三年目、このような新米の私ですので、皆様にご紹介できるような「実践」などは、何もしておりません。これまでの悪戦苦闘をありのままご報告いたしまして、皆様のご指導をいただきたいと思えます。

報告①

二年間の古典の授業の中で、授業後生徒が「おもしろかった」と言ってくれた教材が二つありました。これから、その二つの教材、『源氏物語』と『平家物語』を扱った授業について報告いたします。この二つの授業は、いずれも試験範囲に入らないものでしたので、生徒たちも、又、教える私も、点数のことはあまり気

にせず、授業を楽しめたのではないかと、思います。

二年目、昭和五十八年度の二学期、高二の国語のクラス（この年は高一国語五単位三クラス、高二古典二単位一クラス、高二国語四単位一クラスを担当）で、試験前に四、五時間余裕ができました。私は講師ですから、「一学期は〇と〇と〇をやりましょう」「〇と〇は削りませんか」「次は〇〇をやって下さい」と専任の先生から連絡が来ます。そしてその通りに進めますから、この時が自分で教材を決められる初めての時間でした。

できれば現代文ではなく古典で、終わった後「もっと読んでみたいなあ」と思ってもらえるものが好ましいと思えました。現代文と古典が一つになり「国語」となつてから（我校では、高二で国語Ⅱ四単位の他に古典二単位が必修となっています）別に古典の時間があり、国語の時間にも古典がたまにあります。生徒としては、バラバラに入ってくる古典に戸惑いつつ、結局は好きになれずに、親しみを持てないまま苦手教科の部類に入れてゆく者がほとんどでした。ですから、なんとか古典のイメージを一新する

必要があると、常常思っていたからです。

一応生徒に希望を聞きますと、偶然にも古典で、『源氏物語』を、という声が多く出ました。これには訳があります。今『源氏物語』を扱ったマンガが人気を呼んでいるからなのです。「本物の源氏物語はどういうものなのか知りたい」ということのようにでした。

私も、その情報を得ていたところで、マンガも四巻まで（須磨・明石から都へ源氏が戻ったところまで描かれていて、まだ続くそうです）入手済みでした。ですから、教材として、小学館古典文学全集より、原文とそれに対応する訳文の適当な所（桐壺・若紫・末摘花などから）を選び、マンガから同じ場面のスケッチをいくつか拝借して、マンガ入りのテキストを作りました。一時間にプリント一枚、一つのエピソードとしました。

『源氏物語』は、彼女たちが三年生になると、再び「古典」の授業で取りあげられるようでしたので、文法は一時間に一つか二つ触れるだけにし、訳文もテキストに載せましたから、時間内には、テキスト前後の状況説明、本文範読、全員で音読最低二回、テキストの解説ということにしました。

すると、マンガ入りだということで、テキストを貰うことをたいへん喜び、又、解説をしてゆくと、次はどうなるのかと興味津津です。「試験前の一時間は自習にしようか」と聞きますと、「源氏の続きがいいノ」と言うほどでした。状況がわかった上で、原文を声に出して読んでいると、自分も平安時代のお姫さまになったような気がするなど、古文と自分たちと、それ程懸け離れたもの

ではないと思ってくれたようです。

報告②

次に『平家物語』の授業についてご報告いたします。二年目、三学期の後半になって、先ほどの『源氏物語』のクラス（高二国語のクラス）で、再び時間が余りましたので、それを利用して、古文に、前回とはまた別の方法で、取り組んでみようと考えました。

この時、漠然と私の頭の中にあっただのは、福音館文庫から出ている、木下順二著『古典を訳す』の中に出て来た「群読」という言葉でした。この本の中で、木下順二は、「日本古典の原文による朗読はどこまで可能か、というテーマで勉強会をもち、いくつか試みを重ねてゆくうちに、古典、ことに『平家物語』の場合など、その文体がもっているところの時に猛々しいまでに力強く、時に弱々として幽かなまでに美しい言葉のうねりを表わすには、あるとき複数で、あるときソロで朗誦するという方法を自在に駆使するのが適当なのではあるまいかと考えました。」と書き、その方法を念頭におきつつ『平家』の原文をアレンジして『知盛』を作った、とあります。

これを思い出して、ほんの少しでも、これに近づくような方向でできれば、と思いました。『知盛』を目指して、という思いで考えたのが生徒たちの「読み」をテープに録音してみようということでした。自分たちの「声」を聞く、といった時、授業への取り組み方もまた変わってくるのではないか、と思ったからで

す。

教材を決める時、『知盛』の影響から、『平家物語』にしてみました。『平家物語』の中でどの部分にするかは、随分迷いました。女の子ばかりだということ、三年生になると、修学旅行で広島方面へ行く(瀬戸内海を見ることもあるだろう)ということ、を考えると、女性が主人公になっていて、瀬戸内海あたりが舞台のものがよいだろう、と思い、『小宰相身投げ』の段にしました。もっと適当なところがあったかもしれないが、恥ずかしながら私自身『平家物語』を完読しておりませんので、見つけれませんでした。

テキストには、小学館古典文学全集『平家物語』から巻九「落足」の段の最後の部分と「小宰相身投げ」の段をとり、「小宰相身投げ」の段では、最後の部分(小宰相と夫通盛のなれそめの部分)は省きました。授業を始めるに際して、細かい予定は立てませんでした。最初の授業の時、「朗読のテープをつくらう」という提案だけしておき、テキスト本文を全員で音読するところから始めました。どういう手順で進むことになったかは、以下の表をご覧ください。

時数	授業内容	気付いたこと
1	前時限にテキスト(ブリント四枚原文だけのもの)を配布	
	「小宰相身投げ」に至るまで	

のダイジェスト説明。板書し、メモさせる。

前時限に行った練習問題返却の間、板書を写させる。

簡単な系図の板書、写させる。

以上をもとに説明。小宰相の含まれる平家の状況をつかませる。

(A)を範読二回。短かく区切って後について読ませること二回。

本文解説をしながら意味をとる。地名の確認。「修学旅行で通る所」と地図を配布

前段をふり返って、平家がどういう状況にあるかを再確認
(B)範読二回。全員で音読二回。

小宰相と通盛のなれそめ、小宰相についての説明。

・北の方
・乳母
の説明

板書・メモの必要はなかったのではないか。時間がなかった。

五時間目であることも手伝って、居眠り、おしゃべりが多い。

テキスト四枚をきちんと読め、聞けるテープがでるが心配

なかなか平家の状況をつかめず、もどかしい。

前回よりおしゃべり減る

<p>6</p> <p>古文班の台本全員に配布。</p>	<p>5</p> <p>(E) 範読二回。全員の音読二回。</p> <p>グループ分け。</p> <p>① 古文朗読 十七人</p> <p>② 古文音響 九人</p> <p>③ 現代語訳朗読 七人</p> <p>④ 現代語訳音響 八人</p>	<p>4</p> <p>(D) 範読二回。全員の音読二回。解説。</p> <p>・ 六道四生</p> <p>・ おなじ蓮</p> <p>説明</p> <p>かなり興味を示す</p>	<p>3</p> <p>(C) 範読一回。解説後生徒の音読二回。</p> <p>古文・現代語訳の二班に分けてテープに録音し、鑑賞会を行う旨話す。</p> <p>(希望)</p> <p>古文 四十人</p> <p>現代語訳 三人</p>
<p>古文班「あみだ」で決め</p>	<p>テキスト中の挿絵に興味を示す。</p> <p>(入水した小宰相を引きあげようとしている絵)</p>	<p>二班に分けることを相談中、古文・現代語訳班にそれぞれ「音響効果」を考える班を作りたいという声が出る。</p> <p>次の時間までに、やりたいをものを決定してくることを指示。</p>	<p>当時のお産の話から、真剣になる。質問も出るようになる。</p>

<p>9</p> <p>「ロングホームルーム」の時間をいただく。音楽室を借りて音を出しながらのリハーサル。</p>	<p>8</p> <p>古文・現代語訳も朗読班・音響班が一緒になり「読み」と「音響」の説明・検討。</p> <p>「ロングホームルームの時間を使いたい」と言う</p>	<p>7</p> <p>(古)朗読班―読む練習</p> <p>(現)朗読班―台本作り、それぞれ訳の検討</p> <p>(古)音響班</p> <p>(現)音響班</p> <p>読み手</p> <p>の様子を見つつ相談</p>	<p>キャスト決め。現代語訳班、台本作り。キャスト決め。</p>
<p>(古)音響班、読みの練習不足の(古)朗読班を怒る。</p>	<p>(古)朗読・音響班―大世帯のため、なかなかまとまらない。</p>	<p>(古)朗読班―読めない所が多い。長い所を読んでいる時、他の者が手持ち無沙汰でおしゃべり。</p>	<p>る。読ませるとひどくたどたどしい。</p> <p>現代語訳班―話し合いで決める。台本は基本的には古文班に準じ、自分の役は特に丁寧に訳す。</p>

10	録音	古文班—予定通り完了。
11	鑑賞会 録音が完了して、 なかつた現代語訳班は録 音しながら発表 感想文を書かせる。	非常に真剣
	自分たちの作品を鑑賞で きなかつた現代語訳班は、 春休み村井宅で鑑賞会。	

授業内容の中で、(A)(B)とあるのは、授業を進めてゆく上で、便宜的にテキストを区切ったところす。できあがつたテープをこの紙面では、お聞かせできないことがたいへん残念ですが、この後に、古文班の台本と、現代語訳班の台本（生徒が作成したものの）の一部を紹介させていただいて、テープの代りといいたします。

(古文班台本一部)

全 平家物語

ナレーター

いくさやぶれにければ、主上をはじめ奉って、人々みな御舟に召して出で給ふ心のうちこそ悲しけれ。

A 塩にひかれ風に随って、紀伊路へおもむく舟もあり。

B 葦屋の沖に漕ぎ出でて、浪にゆらるる舟もあり。或は須磨より明石の浦つたひ、泊さだめぬ梶枕、かたしく袖もしをれつつ、臚にかすむ春の月、心

C

D

をくだかぬ人ぞなき。
或は淡路の瀬戸を漕ぎとほり、絵島が磯にただよへば、波路かすかになきわたり、友まよはせるさ夜衝、是も我身のたぐひかな。

E

行くささいまだいづくとも思ひ定めぬかとおほしくて、一谷の沖にやすらふ舟もあり。
かやうに風にまかせ、浪に随ひて、浦々島々にただよへば、互に死生も知りがたし。

F

国をしたがふる事も十四箇国、勢のつく事も十万余騎、都へちかづく事も僅かに一日の道なれば、今度はさりとともたのもしう思はれけるに、一谷をもせめおとされて、人々みな心ぼそうぞなられける。

ナレーター

全

ナレーター

滝口時員

小宰相身投
越前の三位通盛の卿の侍に、君太滝口時員といふ者あり。北の方の御舟に参つて申しけるは、君は淡河のしもにて、かたき七騎が中にとりこめられて、うたれさせ給ひ候ひぬ。

(現代語訳班台本一部)

……略

ナレーター

波の音に混って、揖の音が聞えてくる。
(乳母の女房が) さめざめと泣きながら、くど

くどと恨み言を言ったので、小宰相はこの事を聞かれてまずかったと思ったのか

小宰相あわてて、少し声を大きく、前より力強く

小宰相
そ、それは、……私の身にもなってみてください。世間一般には、悲しいからといって身を投げようなどという事は、よくある事です。けれども、それを思い立ったらお前に知らせないです。ことは決してありません。夜もふけたし、さあ寝ましょう。

乳母の女房
十分に考えて死をご決心なさるのなら、深い海の底までも一緒にお連れください。あなたに先立たれてしまった後、生きていようとも思いません。

ナレーター
などと申して、小宰相のそばにいながら、乳母の女房がちよつとうつらうつらした隙に、小宰相はそつと起き出して船ばたに出て行った。

だんだん波の音と揖の音大きく。時々鳥の声。

漫々と水の張っている海の上なので、どちらが西の方かわからなかったが、小宰相は静かに念仏をなさる。沖の白州に鳴く千鳥の声や、海峡を渡る船の楫の音が聞こえる。

音を小さくしてゆく。同時に小宰相の念仏の声がしてくる。

……
略

以下、授業中に気付いたことを中心に、簡単に説明いたします。一時間目、本文に入る前に、小宰相の含まれる平家の状況説明を板書してテキストに書きとらせることから始めました。しかし、これに随分と時間がかかり、だれた雰囲気を作ってしまった。書きとらせておけば、後で再びそのメモを見ることもできるし、また、おしゃべり防止の安易な方法でもあるし、ということでした。徒に課したのですが、あまり良い方法とはいえません。このだれた雰囲気は音読する時にも持続し、範読後読まさせてみた時には、この調子では、はたしてきちんと読めるようになり、人に聞かせてもおかしくはないようなものができるのだらうかと、心配になるほどでした。又、何度説明しても平家の状況を掴んでくれないもどかしい思いもしました。

内容を進めていって、三時間目(○)の、小宰相が乳母の女房に告白をする場面になりますと、テキストへの目の向け方がずいぶんと変わってきました。例えば、小宰相の言葉で、「お産の時、十に九つはかならず死ぬる」また、死んだ夫通盛の姿を「まどろめば夢に見え、さむればおもかげにたつぞかし」生きていて恋しく思うよりは水の底へ行きたい、といったところになると、真剣に文字を追ってゆきます。内容的にも興味を持ち、又、読んで口から出る音のつながり、語呂のよさも気に入った様子で、最後に書かせた感想文にも、このあたりに関するものが多くありました。

グループ分けのことは、初めの段階から少しづつ話してきたのですが四時間目くらいになると、ただ朗読したものを録音するだけでなく、効果を高めるために「音」を入れたい、従って音響を

考える班を作りたい、という声が出て来ました。結局、古文、現代語訳の朗読班にそれぞれ音響班ができ、全体を四班に分けるということになりました。生徒の希望に従ってグループに分けると、古文班が多いという偏った編成になってしまいました（一通り解説も訳もしてある後でしたが、現代語訳の班は自分たちで台本を作らなければならないという点で、古文の班に人気が出たのです）が、「そのままやりたい」との強い要望がありましたので、人数調整は行いませんでした。

古文の台本は、私がざっと作ってしまいました。充分な検討をせずに台本にしてしまったので、読む長さに随分違いが出来てしまいました。今回の授業で一番残念なことをした、と思ったのはこの点です。もう少し工夫が必要だった、生徒に考えさせることをしてもよかったのでは、と反省しています。

古文の台本はこのようにこちらから与えてしまったので、現代語訳の方はどうしようかと迷ったのですが、改めて現代語訳班の生徒に聞いてみますと、人数も少なく、まとももあり、古文の台本をもとに自分たちなりに作ってみたいというので、そのまままかせてしまいました。

音を出しながらの練習が始まると、現代語訳班は問題なく進みました。古文班は難航しました。朗読班の読みがあまりにたどたどしいので、準備をして来ている音響の班があきれて怒り出したのです。そこで音響班のリーダーに音頭をとらせ、音響班は朗読班が気分が出るような音響を、朗読班は音響班の努力を無駄にしないようにと、もう一度全員で相談しなおさせました。その結

果、朗読班の者も、自分の台詞のないときは音響を手伝おう、ということになりました。例えば、合戦のトキの声やどよめきは、全員の声、手足などで表現するといった具合です（これが、後で聞いてみると、おもしろい効果を挙げていました）。このため、台詞の少ない者も手も無沙汰が解消し、全員が参加している、という自覚を持つようになったようです。

録音の段階になると、こちらが口を出すことなど何もないくらい（却って、「後でびっくりさせるから見に来ないで」などと言うほど）、皆が積極的に進めるようになりました。

古文班は予定の時間内に録音を終えたのですが、現代語訳班は音響に随分力を入れて細かいところまで気にしていたので、放課後放送室に残って続きを……、ということになりました。ところが、五時過ぎまでかかって完成したものの出来に納得ができません。言い、翌日の朝七時半からもう一度やり直すことになりました。しかし、この時はテープレコーダーのアクシデントのため録音できず、結局鑑賞会の時、現代語訳班は録音をしながら発表をしました。自分たちのテープを聞くことのできなかつた現代語訳班は、春休みになって我家に集まり鑑賞会をいたしました。

鑑賞会が終わって、生徒に、内容についてと授業方法についての感想文を書かせました。内容に関しては、小宰相が身投げをすることに対する賛否両論（特に乳母の女房へ告白していた部分に關するものが多い）。また、乳母の女房の気持ちに共感を持ったもの。「戦」が、「いつものこと」でかたづけられてしまう時代に

ついで考えたもの（現代との比較でとらえたものもいた）、そして、戦いの陰で、一番悲しみのしわよせが来るのは女性だ、と訴えるものもありました。

授業方法については、「古典なのに『ムズカシイ』と感じないで、『スッ』と作品の世界に入ることが出来た」「登場人物の心情や情景がよくわかった」「何度も読むから、意味が自然に感じられた」「音響を考えるために情景をいろいろに想像した。すると、古いはずのものが生き生きと感じられた」「次は読み手をやってみたい」「他のものもテープにとりたい」等、楽しかった、クラスがまとまってよかった、という感想を得られました。

今回の授業を通して、生徒たちが古典の時間を積極的に、そして楽しく感じてくれたことは、今までに比べると、大きな進歩だと思います。が、今回生徒たちが、「おもしろい」「楽しい」「興味を持った」と感じたのは、『平家物語』そのものよりも、「テープに録音する」「自分たちの声を聞く」という点に、多くあったのではないのでしょうか。今回は時間切れで、テープを聞くところまでで学年が終ってしまいましたが、彼女たちが「おもしろい！」と感じた後、再び授業を持って、内容そのものをもう少し丁寧に教え、そしてより深く物語を理解するためには、やはり文法が重要なのだ、と感じさせる時間にできたらよかった、と思いました。

おわりに

まだ専攻科の学生の頃、高校時代お世話になった先生が、「教

師には、大道芸的な要素というものが必要なのではないかしら」とおっしゃったのを記憶しています。先生は私に向ってではなく、半ばひとり言のようにおっしゃいました。

授業をされていて、非常に平坦な、自分でも聞いていたら退屈してしまいうような時間が流れているのに気付くことがあります。また、私の声が、生徒の耳に入ってゆかない、入ってもすぐに通りすぎているのを実感する時があります。そんな時、決まって浮んで来るのがこの言葉です。
(麴町学園女子高等学校)

現場からの報告

未完の作文

母親が酒乱の父親と離婚したという家庭の女子生徒が、そのいきさつを書いてきた。母親側に加担しての作文で、父親への憎しみと怒りの言辞に満ちている。作文としてはまとまっていたが、父親への批判が一方的なので二、三度の書き直しをさせた。そのうち、父親の悲しみにも目が向き、内部に混乱が生じたのか、書けなくなり、作文としては「未完」に終わった。

作文の評価はむずかしいが、私は、認識の深化を評価して、高い点をつけた。

(N)